

日本農業新聞

小学校にある長さ25センチのプールを思い浮かべてほしい。幅は12センチ。泳ぎの苦手な子どもにとって向こう側は、はるか遠くのように感じられる。ここに親指と人さし指、中指の3本の指で塩をつまんで溶かす。塩ひとつまみは3ミリほどだ。水の深さは1センチ。低学年の子どものなら、つま先立ちが必要だ。このときプールに入っている水の量が30万リットル。重さにして300トン、すなわち3億グラムになる。こうしてできたプールの塩水濃度が、0.01ppmだ。

ドラム缶1本が200リットル、鶏卵1個の重さは60グラム、畳2枚で3.3平方メートル。身近な数字は感覚で理解できるが、

残留農薬

論説

0.01ppmなどという微小な数字には、実感がわかない。

「%」は100分の1を意味するから、100分の1の塩が入っていれば、1%の食塩水になる。したがって塩10ミリに水を注いで1リットル(1000ミリ)にした塩水が、濃度

は、あまりにも薄く思える。ところが5月から始まる農

薬のポジティブリスト制では、この0.01ppmという小さな数字が問題になる。薬剤に よっては、農産物への残留が0.01ppmを超えると出荷できなくなるからだ。キャベツ1

で取り扱った食品検査のデータをまとめ、ポジティブリスト制が導入された場合、どの程度の食品が基準値を超えるかを試算して示した。その結果、サンプル数の2.5%で「基準を超える」と考えられた」としている。生協が扱う

ような品目でも、これだけの基準オーバーが懸念される。それだけに農家には、薬剤の飛散防止などに細心の注意が求められる。

新制度は5月29日から。しかし、農家にはその前の栽培期間から対策が必要だ。さらに、制度導入前にやっておく必要がある。0.01ppmとはどんな数字なのか、農家自身が自覚をし、同時に消費者にも理解をしてもらうことだ。

プールにひとつまみの塩を入れて作った塩水。この濃度で規制されることにどんな意味があるのかを、生産者と消費者の双方で考えたい。制度が5月に始まることは決まっているので、次に考えるべきことは新制度をどう運用するかだ。残留農薬がしばしば問題になる輸入農産物への対抗措置にもなるが、国内の農家を不安にさせる要素も持つ。運用の仕方でも、日本農業が良い方にも悪い方にも変わる。そこを関係者は自覚したい。

考えよう0.01ppmの意義

1%の食塩水だ。これなら何とか塩の味が感じられそうな気がする。「1%」は100万分の1の意味なので、0.01ppmが1億分の1を表すのは分かる。では0.01ppmの塩水は、なめた時に、塩辛さが分かるだろうか。味を感じるに

玉の重さが1キログラム。その1億分の1というところ、0.00001グラムだ。わずかな農薬の残留が、出荷の可否を分ける。

日本植物防疫協会が昨年9月、東京都内で開いたシンポジウムで、日本生協連商品検査センターの担当者がこれまで

求められる。

新制度は5月29日から。しかし、農家にはその前の栽培期間から対策が必要だ。さらに、制度導入前にやっておく必要がある。0.01ppmとはどんな数字なのか、農家自身が自覚をし、同時に消費者にも理解をしてもらうことだ。

プールにひとつまみの塩を入れて作った塩水。この濃度で規制されることにどんな意味があるのかを、生産者と消費者の双方で考えたい。制度が5月に始まることは決まっているので、次に考えるべきことは新制度をどう運用するかだ。残留農薬がしばしば問題になる輸入農産物への対抗措置にもなるが、国内の農家を不安にさせる要素も持つ。運用の仕方でも、日本農業が良い方にも悪い方にも変わる。そこを関係者は自覚したい。